

---

**桜**

水桐

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

桜

### 【Nコード】

N5503S

### 【作者名】

水桐

### 【あらすじ】

桜の木と終末と凱斗。

「綺麗に咲く桜の下には死体が埋まっている。」唐突に昔読んだ本だか何かにそんなことが書かれていた事を思い出した。その本の題名すら忘れてしまったしもう一度読みたいなども思わないがただ、そんなことを言われようともやはり綺麗なには変わらないのだらうと思う。

そう思いながら凱斗は勤務先に近い歩道に植えられ満開に咲き誇る桜並木の下を歩いてきた。今日は午前勤務だったので昼前には仕事が終わったのだが、そのまま家に帰りぼんやり夜まで過ごすのもどこかもつたいなくて散歩がてらに桜を見ながら町内を回ろうと思いつたのが数時間前。そして今、ちらと見えた桜を追ってみたらこの桜並木を見つけたので丁度いい、と思い歩いてきた。この町で生まれ育った訳ではないので最近気付いたのだが、まず驚いたのが植えられている桜の多さで少なくとも自分の生まれた町ではこんなに植えられてはいなかったんじゃないかと思う。この街には学校には必ず一本以上はあるし道端、川に沿った道にも絶対に桜の木があった。

「…そこまで植える意味があんのか？」

そう呟きながらも桜が列を成し咲き誇るその姿を眩しそうに眺めながら歩みを進める。何だかんだ言いながら桜は嫌いではないのだ、むしろ好きな部類に入る。桜はつきりした色ではないのいいのだと誰かが言っていた。薔薇とかチューリップとか、そういう類のはつきりした色だったらあんなに綺麗に見えないしむしろ目の方が疲れてしまうと思う。そんな桜は桜とは呼ばない、『桜色』としか表現できないあの薄い桃色だからこそその桜なのだ。

更にその人が言っていたことを拝借すると。ひまわりやカーネーションなどは単体で部屋に飾って見て楽しむが、日本人だけは桜は

咲いているその『空間』の空気ごと素敵だと感じるらしい。

それを聞いたとき自然に「ああ。」と納得してしまった。本当にそうだと思った。やはり桜は日本人にとってそれほど馴染み深く、特別で、誰もが咲く事を待ち焦がれる、色々な意味で心を乱す特別な花なのだと思ったのだ。

そう考えながら「じゃあやはり此処は素敵な町だ。」という結論に至る。桜が多いというだけじゃない。それを純粹に楽しむ町の人たちも、「最後だから」と悲観的にならずに生き続けようとする人たちも、此処へ赴任してきた時からつくづく思っていた隣人へ優しく接するその心遣いも、全てを含めてやはりいい町だと思った。

やがて、歩いていると目の端に何かがちらりと横切る。何かと思いを追うように振り向いてみると、それは桜の花びらだった。目線を桜の木に戻すため空を仰いだ瞬間。天へと枝を伸ばしその先々で咲き誇る桜の花びらがざあつ、と吹いた一陣の風に巻き込まれるかのように一斉に青い空へと舞い上がった。

その花びらの行先を目で追ってみると、ひと際大きい桜が見えた。向かいの桜並木の上からちょこんとつぺんが見えてるだけだった。がここにある普通の桜より大きいということだけは分かる。「まだ見てない桜があるのか。」と思いきろしく心を躍らせながらその桜並木を突き進むと、それは見えた。

開けた芝生の敷地の真ん中に生えるそれは大きな、本当に大きな桜の木だった。それは今まで見てきた中で一番に大きいと断言できるほどの大きさで、あまりの大きさに柄にも無く驚いた凱斗はいつも寄せている眉間の皺をその欠片も見当たらないほどに目を見開きそれを見上げる。「公園だろうか」と思いながらゆっくりと近づいていくと天は桜色で埋め尽くされた。風が吹くとさわさわと心地好い音と共に桜の香りがふわりと漂ってくる。その香りに包まれながら言いようもない安らぎを感じた凱斗は空を仰ぎながら思わず目を閉じた。

「(…こんな所で昼寝でもできたら、どんなにいいだろうな。)」  
公園で夕方まで寝ていた彼ではないが、この空気に包まれて眠れたらどんなにかしあわせだろう、と思う。そんなことを考えさせられるほどに此処は居心地がよかった。

そしていつしか聞いたことある噂を思い出す。近所に暮らすおばあさんが昔言っていたことを聞いたままでだが、この桜の木が満開に咲き乱れた時に木の幹へ願い事を刻めば。

「その願いはどんなことでも叶う……か。」

その噂の所為で幹が傷付き柵で囲われたんだ、と丁度そのころ町内会の人に聞いたことがあるがどうやら今はその柵は無いらしい。恐らく「最後だから」というのも大きな理由だろうが、酷い有様だったであろう幹の傷はそんなに気になるほどのものではなかった。誰がやったのかは知らないが手入れはちゃんと行っていたとも聞いたのでやはりこの町の人みんなに愛されているんだな、と思う。

更に近付きその太い幹に手を触れてみた。そうして何があるという訳でもないのだが、唐突にそうしてみたくなった。硬い木の皮を撫でながら先程思い出した噂のことを考える。噂を信じ願うだなんて自分にしては柄でないことは分かっていたがそれでもこの桜の木なら、叶えられはしなくても受け止めてくれると思った。自分の拙い願いを。

傷つけることはしたくないな、と思い撫でていた太い幹へ頭を預け、願った。

『あのアナウンズが嘘であれ本当であれ、皆が生きる意味を見失わないように。進む道を違わぬように。最後の日には悔いの残らぬよう、自由に選択していった先が自分達にとって望むものであれ。』

一つに統一することなどできなかったたのでこの桜の木には少し申し訳ないことをしただろうか。と思い頭を上げ、名残惜しそうに幹から手を離れた。そして満開に、何処までも美しく咲き誇る桜の木を目に焼き付けるため暫くじっと見つめる。ふとポケットに手を入れようとしてケータイがあることに気づき、ケータイで写真を撮る

うかと思いつて桜の木にケータイのカメラを向けてみたのだが、やはり大きすぎて入りきらなかった。ううんと唸り何を撮ればいいのか迷っていたが、下から撮影することで落ちついた。初めてケータイのカメラ機能を使ってみたが我ながら上手く撮れた、と少し嬉しくなったが周りで見ている人などいないのに顔には出さない。それでもなにか、心の中がじんわりと暖かくなった感じがしていた。

信じている訳でも信じていない訳でもないが「最後になるのなら」と思ったらどうしてもこの桜を目に焼き付けておきたくなってしまったのだ。それでなくとも心奪われそうになった桜だ、何らかの形に残したかった。

「(……世界が、終わるその時は。)」

この桜を思い出すのだろうか。と考えたが小さく首を振る。まだ半年以上はあるのだ、その間にこれとは比べ物にならないほど凄いことが起きるかもしれないし見れるかもしれない。そう思うとなんだか今から決めつけておくのはいけないと思った。「それに俺は、自分の道を他者に終わらせる気は無い。そんなもん今考えることじゃない。」と先程の憂いを多少強引に振り払う。

最後に青空に映える大きな桜をじつと見て、背を向けた。もう時刻は夕刻の5時を過ぎており西の空は淡い茜色に染まっている。ざああ、と優しく吹く風が背中を押し、それと共に舞い散る花びらが歩く凱斗を追い越して空へと消えていった。

(後書き)

そろそろ桜のシーズンなので切ない話をひとつ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5503s/>

---

桜

2011年4月21日19時25分発行